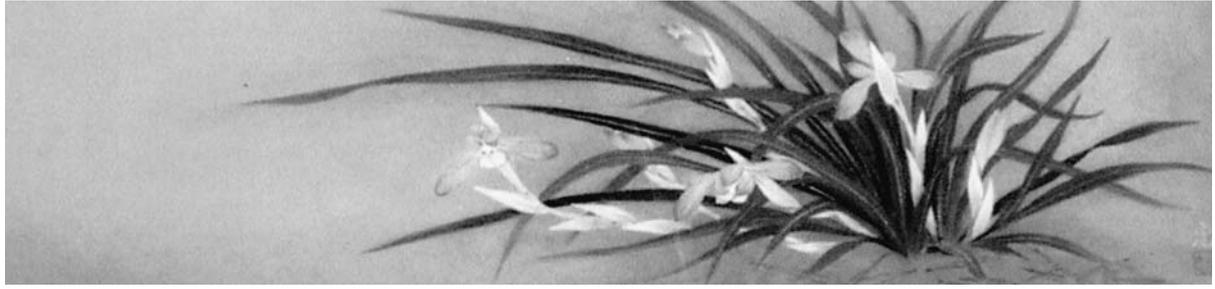


山崎町文化

'04 - 2 * No.23



山崎町文化協会



日本の自然

山崎町文化協会会長 壺 阪 壽

日本は本当に自然の豊かな国であります。しかもそれが四季折々に変化を
してゆくということですから、日本の文化も又人々の生活様式もその自然を
ベースにしたものになってゆくのは当然のことであります。

万葉の昔から日本人はその自然の美しさを歌に表現し、或は着物にその柄
を取り入れたりと大変自然の風物に影響を受けています。

日本には昔から旬ということばがあります。この旬というのはその時にそ
れを食べれば美味という意味も勿論ありますが、それと同時に健康にも非常
に良いということもあるのです。だから旬の物を食するということは美味で
健康にも良いということになります。然し最近の日本人の食生活を見ても、
はたして此の旬を守っているのだろうかと疑れます。例えば果物一つにとっ
てみても四季折々の美味なのがあるのに、全く季節を無視したようなものも
沢山出回っています。私は終戦後シベリアに抑留させられましたが、それか
ら解放されて、引上げ船が舞鶴の港に入った時に本当に我々祖国日本は自然
の美しい国であると心から感動したのを今でも思い出します。

成程大陸の風景には雄大さとか、果てしない広がりといったものはありま
すが、日本の風景のような繊細さもなければ四季の変化もありません。そこ
にあるのは短い夏と厳しい冬とがあるだけです。

私等は此の豊かな自然を祖国とし、その環境から生まれた色々なすぐれた
文化を持っていることを誇りとしていくべきだと考えます。

目次

日本の自然	壺 阪 壽	2
蟹	浅田 耕三	3
直木賞作家宮尾登美子さんの講演を聞いて	藤井 久子	12
短 歌	森本萬千子	13
俳 句	芦田 八重	15
第一回 山崎能	三谷 恭三	17
国際社会に思う 子供達への伝統文化	勝部由美子	17
バンブー5 結成十年の軌跡	前野 弘幸	18
くらしといけ花	中村 悦子	18
新しい新芽が大樹に育ってほしい	松本 明	19
山崎植物同好会の活動	鳥越 茂	19
人生七転び八起	西川 慶子	20
町民合唱団の移ろい	藤井 七代	20
詩を吟じ炭を焼く	小田 博己	21
美の追求	田口 實	21
趣味と私	福岡 久藏	22
平成会の十五年	前野 洋一	22
「子守り歌」をうたったことがありますか	塚田 美紀	23
和太鼓仲間の若人にささえられ	上村 道江	23
新潮会の歩みと現状	安井 擴	24
獅子舞に携わって	雲田 章彦	24
土地の開発に思う	春名 俊夫	25
事務局だより	藤村 清一	26
編集後記	荒木 俊介	26
表紙画／カット／	片山 吉恵	26
表紙題字	尾崎 正一	26

蟹

山崎文学会 浅田耕三

文化三年（一八〇六）二月、知恩院門前袋町の長屋から南禅寺の山内常林庵裏の草庵へひき移った上田秋成は、たった一間の部屋の壁に、縦八寸、横尺二寸の紙を貼りつけた。

家宝 かんしゃく丸

第一、いぢをつよくし、はらのさむさにたふべし

禁物

酒 肴 たばこ 油

すべてのもの くさをきらふ

文人 茶人 財主 臭氣^レ不可対^レ

出店類葉無之候

これは秋成特有の意地。

酒、たばこはともかくとして、肴、油は七十三の老人といえども撰らねば栄養失調になる。頭の働きも鈍くなる。にもかかわらずこれを禁物とした。拒んだわけではない。願ってもそんな贅沢なものはどうせ口に入らぬのである。ふざけることで自嘲をまぎらそうとした。

肴、油脂の連想から、ついでにくさきもの一切を嫌うと書いてみる。さらに、文人茶人も金持ちといっしょくたにして、その俗臭^{わら}ぶりを嗤い拒もうというのだ。

「はらのさむさ」はひもじさ、それを意地で乗り切ろうという所は、掛け値なしの肚^{はら}であろう。

思えば秋成七十三年の生涯は、この意地の連続であった。

享保十九年（一七三四）二月、秋成は大阪曾根崎で生まれた。幼名を藤作という。私生児である。頼春水の『掌録』には「江戸旗本の孫」、秋成自身の

『岩崎の記』によると、生まれる前年に亡くなった小堀左門という、小堀遠州の血をひく人物の子という推論がなりたつようだが、はっきりとはわからない。元文二年（一七三七）、四歳で実母に棄てられるが、堂島の紙油商上田茂助に拾われて養育された。茂助夫婦は優しく、秋成を大切にした。けれど、不運はさらにつきまとう。

翌元文三年、秋成は重症の痘瘡（天然痘）にかかり危篤におちいってしまう。天然痘は突然高熱が出て顔が痒くなり、胸手足へとそれがひろがる。搔くと全身に赤い発疹ができ、痒みはさらにます。猛烈なかゆみと共に発疹は大きくなり膿をもつ。顔と胸が一番ひどく、特に顔が腫れ上がる。

江戸時代、死因第一位の疫病である。

一晚のうちに顔から首筋にかけて発疹がつながり合っておできのようになり、二目とみられぬ面相になってしまった藤作は、素人目にも重症で、はたして医者は一見見るなり、「ああ、これはいかん。もうとても見込みはないのう。」

早々に腰を浮かし、「よう保^もって朝までじゃろ。あとに悔いが残らんように、せいぜい看病してやんなされ」

しかし養父母はあきらめなかった。

母のよねは枕元につきっきりで水枕を替え、茂助は深夜、信心する加島稲荷へ走った。堂島から一里半の道のりである。息せき切ったどりつき、ようよう石段を駆けあがって神殿前にひれ伏した。

「お救い下され。秋成をお助け下され」

また石段をかけ下りる。お百度参りである。夜明けまでかかった。終わった時は精も根も尽き、石段下の石畳に座り込んだ。そのままずるずる眠った。夢を見た。

お姿は見えぬながら朗々としたお声が聞こえてきた。

「その方の信心深さを嘉^{よみ}して嘆願きき届け、子供を病から救ってやろう。その上藤作には六十八歳の寿命をさずけてとらす」

はっと目ざめて狂喜し、飛ぶように茂作は家に帰った。

見ると藤作の顔は腫れがひき、発疹も頂きに黄色い膿がぼつんと見えるが、小さく赤くなっている。昨夜よりずっと軽くなったように見えた。

二日で痲ができた。結痲期というそうだがこうなると死亡のおそれはぐっと減る。また二日たって痲は乾きぼろぼろ落ちた。

罹って十日後に癒えた。罹患者の七割は死亡するはやり病から藤作は生き返った。

痘瘡という病は治っても失明したり醜いあばたをのこすものが多かったが、さいわいあばたものこらなかつた。

「もったいない事じゃ。お前の体内には神霊が宿っておられるのじゃぞ。神様によっていかされておる命じゃ。それを忘れるんじゃないぞ」

信心深い養父母は毎月一度はわが子を抱いて加島稲荷へ参詣し、神前で五歳の彼に言いきかせた。

享和元年（一八〇一）九月、上田秋成は摂津国西成郡加島村の加島稲荷へ、自作の和歌集を奉納した。六十八歳の時である。

六十八の寿命を与える、と父の茂助に神のお告げのあった歳まで、幼少来病弱の彼がたしかに生き延びたのだ。その感謝のしるしであった。『献神和歌帖』というその歌集の自筆添文に、幼児の大患と、神霊の加護によって命を救われた様子を彼は記している。

稲荷神社へ詣でる度に、自分の病と願掛けの様子を父母から聞かされていたのである。終生、彼の心にはこの神があった。

失明やあばたからは免れたが病の痕はのこった。痘瘡の毒が手の指にきたらしく、右手の中指と左手の人差し指の生長が止まったのだ。中指は小指程しかないし、人さし指も普通人のなかばぐらいで、用事をするにもひどく不自由であった。

文化六年（一八〇九）六月二十七日、羽倉信美邸で秋成は七十六歳の生涯を閉じるが、その亡くなる直前に完成した『胆大小心録』に、彼はこう述べている。

「翁五歳の時、痘瘡の毒つよくして右の中指短き事第五指の如し。又左の第二指も短折にて用に足らざれば、筆とりては右の中指なきにひとしく筆力なきこと患ふべし」

寒い夜更けなど机に向っていると、この指がしんと疼いた。片方の手でつつみ込むようにして温めては筆をとるが、すぐにまた疼く。つい、目がそこへ行く。じっとみつめると、小さな指と中で曲がった指は、自分の不運な人生の象徴のように思えてくる。

懸命に看病してくれた養母は、秋成が痘瘡を病んだ翌年の五月に風邪をこじらせて亡くなった。自分の病が母の寿命を縮めたという思いが、以後彼の心を苛んできた。

指を見ているとその母の顔がうかび、きゅっと胸がしめつけられて熱いものがこみ上げてくる。瞑目し、暫くして静かにまた筆をとる。

けれど時々、彼はその指から目をそらさず、反対に両手を揃えて前へつき出し、十本の指を開く事があった。そして不揃いな指の不恰好な手をしげしげと眺める。

自分の意志を超えた何か強い力が彼にそうさせるのである。彼は至極素直な気持ちでその意志にまかす。そうしていると母の面影からこんどは痘瘡の時の痒かったこと、高熱でおこりのように軀がふるえたこと、そんな記憶がまざまざとうかび、その時の死の恐怖感がじんと膝のあたりに痛みをはしらす。

じっとそれに耐えていると次第に気持ちがあたふた、小刻みに両膝が震えてきて、奇妙な感覚が背筋をつき抜ける。目を宙の一点に向ける。

火鉢にかけた鉄瓶が茶色に煤けた襖に影をにじませ、灯が揺らぐ度にそのぼんやりした影がさらにぼやけたり濃くなったりしている。

じっと目を凝らす。影は蛇になる。蛇体をくねらせる度に鱗が銀色に、金色に光る。蛇は襖のしひとつに溶け、この世ならぬ、何か異形のもものがそこに姿を現す。

母のよねは夜明けに死んだ。

とむらいの日、彼は野辺送りの人々の騒々しい声をきくのがいやで、家の近くの空地に入った。古い屋敷が潰れた跡地は、所々に朽ちた柱や崩れた壁を残し、雑草が背丈より高く生い茂っていて軀をすっぽり隠してくれた。そこにじっと身をひそめていると、すぐ近くでびっくりする程大きな声でギリギリと虫が鳴いた。

家の中から母の入った棺桶が担ぎ出され、さんまいの方へ運ばれていくのが雑草の間から見えた。さんまいの土壇場の薪と藁の上にやがて棺はのせられ、火をつけられるのだ。めらめらと炎が棺をつつむ。炎の中に焦げた母の亡骸が黒々と透けて見える――。そのさまを頭に描いてみる。

しゃがんで膝をかかえ、雑草の中から行列の後尾を追う目は乾いていた。

明和五年（一七六八）、三十五歳の時に完成した『雨月物語』の序文で秋成は、自分を「剪枝畸人」と名乗る。手の指を切った、変わった人物の意であろうが、『雨月物語』という怪異譚は、まぎれもなくこの「剪枝畸人」によって生まれたのである。

自分の胸像をおさめた箱書、「自像筥記」に彼はこう記している。「歳六養母逝、性多病、時々発驚癇、後母依慈愛一成長。」

自分は、六歳で母に死なれその後も体が弱く、時々「驚癇」を発したが、父の茂助が迎えた後添いの母の愛情によってはぐくまれた、と。

父は誰ともわからず、実母には棄てられ、その上生来病弱であった彼の人生はたしかに不運であった。が、不幸の中の幸運もなくはなかった。その一つは、この「自像筥記」にあるように父の迎えた後妻、つまり二番目の養母も信心家で慈愛深い人であったこと、二つ目は父の茂助が学問好きで、十歳になった藤作を懷徳堂に通わせ、五井蘭州について学問を習わせた事だ。

人はえてしておのれの幸福は過少に見るが不幸は過大に意識する。

秋成の場合はその「不幸」の指がいつも目先にちらついていて、過敏に過剰にそれを意識せざるを得なかった。

それが「驚癇」を生んだ。

少年時の病を驚癇、成人後を癇性と呼ぶこの持病に彼は終生苦しめられた。癇性というのは中風と共に近世の疾病史によく現れるいわば近世病とでも呼ぶべき病の一つで、類似の症状を呈する者が他にもたくさんあったが、秋成の病状は彼特有のものだったらしい。

発作が起きると動悸がはげしくなり、視点が定まらず、唇をかみ手足がふるえる。ひどい時には嘔吐し、涎を流して失神した。そんなきつい発作はめった

に起こさなかったけれど、急に動悸や呼吸が早くなり、軀が熱くなる程度のこととはよくあったらしい。

彼が十八歳頃、一時浮浪子の生活を送ったのもその絶望感のせいであった。家へ帰らず夜がくると町家の軒下や野っ原の木の下に寝たりした。

そして、ひどい発作からのがれるすべを次第に会得した。

少年の頃、養母の火葬のさまを想像して死別のかなしみを逃れた経験が役に立った。

ある年の秋、二人の友達に誘われて秋成は高野山に登った。

奥の院の入口にあたる一の橋から十八町、弘法大師廟に至る道は、深い杉木立ちと墓石群に埋まっていた。拝殿である灯籠台の簀子縁に上がって廟を拝んだ。

その夜三人は僧坊に泊まった。高野山上の霊域には無数の霊が行き交っているという。そのせいか、秋成は目がさえてなかなか寝つかなかった。次第に動悸が激しくなり軀も熱く、背筋のあたりが硬直するような気がしてきた。発作の前兆である。何度も唱名した。

『平家物語』の、屋島を脱け出た平惟盛が滝口入道を案内に大師の廟に詣でる所を想い出しそれに秋成は気分を集中した。

醍醐天皇の御代、延喜二十一年、勅使の中納言平資澄、般若寺の僧観賢と共に大師入定の窟をあけ、大師の即身仏の御髪を剃り奉り、携えた松皮色の御衣を着せてさし上げた、という。はじめは霧がこめて大師のお姿は見えなかったが、地に伏して祈るうちに霧は晴れはつきりと拝めた。

一体どれぐらい御髪は伸びていたのであろう。一尺程もあったのだろうか。その御髪を鋏で刈り御衣の松皮色というのは赤地や黄地も少し入った明るい色だったのだろうか。その様子をあれこれ想像しているうちに動悸もはずまり、心が次第に平静になった。

早朝に目覚め、暗い墓地を歩いているうちに、昨夜の寝不足のせいか頭が少しふらふらし、またもや心が昂揚してくる気配を覚えた。木の根元に座り瞑目する。

「南無大師遍上金剛」くり返すうちに目を閉じた暗闇の中に、ふいに関白秀次の直衣姿が現れた。この霊場で命を断たれた人、多分その靈魂と行き合ったのであろう――。

殺生関白と悪評をたてられた人物、秀吉の甥で天正十九年（一五九一）関白となったが秀吉に実子が生まれてから次第に養父に疎まれるようになり、その焦燥から悪行を積み、讒を受けて高野山にのされる。しかし権力不入の地のはずのこの高野山も秀吉の力には抗しきれず、ついに文禄四年（一五九四）この山の青巖寺において自刃、二十八年の生涯を閉じた。

介錯した雀部淡路以下十一人の重臣も進んで首を打たれたり切腹したりして殉死した。

すっかり沈静している秋成の耳に、ブッパンブッパンという鳥の啼き声が聴こえた。仏法僧である。その鳥の声を高野山で実際に聞いたことを彼は『胆大小心録』の中で、「仏法僧は高野山で聞いたがブッパンブッパンと鳴いた。形は見へなんだ」と記している。

陽が昇ってから秋成は足取りも軽くお山をあとにした。

一緒に登った友人二人は、いくら話しかけても一言もこたえぬ秋成に、よくある事とは言いながらさすがに呆れ、さっさと先に下りてしまった。

秋成は友達の話し相手どころではなかった。「仏法僧」（『雨月物語』）の構想で精一杯だったのだ。

高野山に登る夢然という出家とその子の作之治の人物設定もたちどころにかんだ。三十余人の女、子供達まで六条河原で無惨に殺された秀次とその家来共の怨霊をどう描くか、そう、あれがよかろう、秀次主従の亡霊出現は『太平記』巻二十五の「宮方怨霊六本杉会事」、それから、あるある、大江六坡の『怪談とのる袋』の「伏見桃山亡霊の行列の事」あの仕組みがいちだんとおもしろい。あれも風説からとったものだが陰々滅々、しかも実感があって怪談としては実に申し分ない。あの構想に倣おう。

夢然、作之治が深夜の不意の行列に驚き灯籠堂に隠れる。その前に杵の音高く響かせ、烏帽子に直衣姿の貴人が現れる。

「殿下のわたらせ給ふ。とく下りよ」

前駆の武士が親子をみつけて言う。腹に響く不気味な声。あわてて二人は這い出して見上げる。こんな真夜中に殿下とは？これは亡霊に違いない――と。

さて、亡霊出現の有様はそれでよいとして、物語のねらいは何としよう。そうそう、『風雅集』に収まる弘法大師作

わすれても 汲やしつらん 旅人の

高野の奥の 玉川の水

あのお歌の従来の解釈を、わしはかねがねおかしいと思っていたのだ。大体、高野の玉川の水が毒などという事はある筈がない。清ければこそ玉川というのだ。わしの信ずる正しい解釈をし、もって高野山霊場の尊さを書こう。

その歌の考証を誰にさせるか。うん、連歌師の里村紹巴、あの男なら教養があつて秀次ともたいそう親しかったというから、あれがよかろう。重臣の木村常陸介にでも質問させて――。

昨夜来感じてきた真言密教の聖地の、やはり何か尋常ならぬ雰囲気が、一篇の物語に具現できそうな気がした。

お山の参拝者は行き交うとみなあいさつを交わす。それにもろくに返礼せず、口中にぶつぶつ呟きながら下りてくる秋成に参拝者はみな怪訝な目を向けた。

異形の指への固執、癩症の発作、それが怪異の世界への思いをかきたてた。そして持病の劣等感が奇妙な闘志をふるい立たせた。

不運を嘆く弱さの反面のしたたかさ、秋成にはそんな二重性があった。

寛政二年（一七九〇）五十七歳の春、寒い日が二、三日続いたある朝、秋成は急に左腕が痛みだし、医者に診せた所、神経痛と診断された。一ヶ月ばかり痛みは続き、夏になってようやく癒えたと思ったら、今度は左眼がかすむようになり十日ほどのうちに全く見えなくなりました。

しろそこひであった。その前年の寛政元年六月に妻たまの母が死に、十一月にはやさしかった秋成の義母がみまかっていた。特に養母は大恩を受けたにかかわらず、ろくに孝養も尽くさなかつた事が、彼にはひどく負い目になっていたから一層こたえた。

「医者になって母上にはきつと孝養をつくしますよ」と彼はこの母に言いつづ

け、念願通りその医者にはなったものの、他の医者のように彼自身のいう「たいこ持」「仲人」「道具の取っぎ」などにより富家に親しく出入りしてへつらう器用さを持たぬため、さほどの稼ぎもないまま、持病の癩性のため三年前の天明七年（一七八七）四月、ついに医業を断念して大阪近郊淡路庄村に退隠していた。妻のたまも養母も彼が医者になる事を期待していたから、それを裏切ったという気持ちがあざうと彼を苦しめていた。

夫婦は二人の母を半年の間に失ったわけで『胆大小心録』には「ソレカラ夫婦の心甚だめっそうになり」と述懐している。すっかり気落ちしてしまったのだ。

その上に今度は左眼の失明である。さすがに秋成はこたえた。友人の画家松村月溪に宛てた手紙に、「天資の廃人となりしなり。これにより文通など甚だ苦渋」と嘆き、後年執筆の『麻知文』には、

「母姑いとほしくここに空しくならせ給ひぬ。（中略）おのが心の咎むればいとう病み臥してほとほとまなこ一つ光を失なひてけり」と悲痛な気持ちをつづっている。

左眼の失明は養母への不幸の咎めと思っていたのである。

しかし、このあたりが秋成の不思議な所、例の人格の二重性で、そんな打撃を受け、まわりにそのかなしさ、さびしさを洩らしたり書いたりしながら一方では本居宣長と烈しく論争しているのである。

数年前、伊勢松阪の国学者本居宣長の『鉗狂人』に対して秋成は『鉗狂人評』を執筆し、またその『漢字三音考』の音韻論をも批判していたが、このころ論争はさらに熾烈になっていた。秋成は論の展開においてきわめて冷静緻密であった。論点も整然として一步もひけを取らなかった。

彼の独特の気質、静と動、躁と鬱がたくみに同居して平衡していたのである。心気が昂揚する半面、ひどくまた醒めてもいた。

その七年後の寛政九年（一七九七）十二月十五日、母の死後剃髪して瑚蓮と名乗っていた妻のたまが急死する。

十一歳で秋成に嫁ぎ、三十七年間、癩性病弱の夫に黙々とつかえ、転々と居を

移し漂泊する夫にもひたすらつきしたがって来た妻であった。

「恋い転び足りしつと嘆けども、すべのなさに野に送りて烟となしぬ」と『麻知文』に秋成は慟哭の文字を刻むが翌年四月、彼はついに全盲となった。七年前、母の死の衝撃で左眼を失い、今また妻の死で右眼も光を失ったのだ。妻に死なれてから死のうと思ひ投身の方法をあれこれ考える。けれどめしいとなってしまうと、かえって死への思いがなくなった。というより、死ぬ気力さえ失せてしまったのだ。真つ暗な中で死ぬのはいやであった。

別に住んでいた養女の慧遊尼に伴われ、秋成は寛政十年夏、大阪によい医者がいるときいて、旧知の河内日下村の紫蓮尼を訪ねそこに滞在する。

彼がかかったのは大阪に出張して開業していた播磨国加東郡福田庄の眼科医、谷川良順、良益、良正の三兄弟であった。秋成はそこで左眼の白内障の治療を受け、七年振りに視力が回復した。良順の手術は、眼球の側方から針を入れ水晶体を墜下させる家伝の横針の手術であった。

その年、寛政十年の秋、秋成は丸太町鴨川べりの羽倉信美邸の別間へ移り、すぐに加島村の借家、さらに知恩院門前袋町の長屋と住所を転々とする。

慧遊尼が羽倉邸をたずねると、養父が一人いる筈の部屋から話し声がする。尼がのぞくと、端座した秋成のうしろ姿がしきりに仏壇に向かって話しかけていた。意外に力強い明るい声であった。

養女ははっとした。妻と死別してから養父は衰えが目立つようになり体も瘠せてきていた。が、もともと秋成は太り肉で首が太く肩もがっしりしている。それが、心もち首を左右に揺らしながら一人座してしきりに話をしている。毫碌か、と尼は思った。

「河内の日下村でみた月の光がそりゃきれいでう。あんまりきれいなんで簀子（縁側）にいざり出て眺めたのじゃが、そしたらその月が急に曇っての、雲にでも隠れたか、それとも目がまた悪うなったかと眼をこすったらなに、自分の涙じゃったのよ——」

そしてふふっと喉を鳴らすようにしてわらう。左目が回復した時の話らしい。よほど嬉しかったのだろう。尼の目に涙がふくらみ、そっと衣の袖で押さえし

ばらくたたずむ。ふと気がつくくと部屋の中のさっきの声ははやんでいた。再びのぞいてみると、養父秋成はもうちゃんと机に向かって筆を走らせていた。話しつつ書いているのだ。まあ、と養女は胸をなでた。毫碌などではない。彼女が涙を拭いている間に、戯作者秋成にちゃんと変貌していたのである。亡妻の三周忌、寛政十一年（一七九九）の冬、彼は冥界の妻と架空に往復させた手紙集「よもつ草」を出す。

常林庵裏の草庵へ移ってから秋成は、八条大通寺内の実法院をさらに足繁く訪れるようになった。実法院はたまの菩提寺で、彼女の遺稿『露分衣』や『夏野の露』などを納めていた。その本堂に膝まずき、手を合わせて彼はここでも参詣の度に大声で彼女と話をした。彼の目には実際にたまの幻が見えているのであった。癡性の作用による幻覚である。

「あの墓はどうじゃ」と彼はにこにこ顔でいう。
「あの境内は静かじゃし墓のすぐ上には紅梅があつて春にはよい匂いがただよってきそうじゃ、なかなかよかろう」

墓とは自分の菩提寺の南禅寺境内西福寺の紅梅の下に自分で建てた寿蔵（自墓）である。建てたのは享和二年（一八〇二）、六十九歳の時であった。

何度も実法院へくるうちに彼は隣の大通寺の僧たちとも仲良くなった。

五、六人の僧達に囲まれ、求めに応じて秋成は創作の怪異譚を話してやる。西福寺滞在中から書きついでいる『春雨物語』や草庵に移ってからかき始めた『ますらを物語』の一部を話してきかせるのである。

話をききながら聴衆の僧達は秋成の見える左目に話の中味の鬼気や異様さとは何か異質の、乾いた光を発見することがあった。聴衆の反応や表情を見ながら、さらに構想を練り描写の細部を工夫するのである。

そのしたたかできくましい秋成が一方『つづらぶみ』では、
「僕己に不才不孝、泊然として三十年。齡まさに七句、心力形骸漸く衰へんとす。死後一人の骨をうずむる者無し。是を以て寿蔵を南禅寺山中西福精舎の紅梅下に卜し、かつ棺を作りて以て寺僧に記し、優遊天命を俟つのみ」
と天涯孤独の身をかこつてみせる。

二年程前から実法院に、与助という三十五、六の寺男がいた。僧達にまじって秋成の怪異譚を聴く一人だったが、最も熱心な聴き手で秋成によく質問もした。読むべき本の指導も仰いでいた。

住職の浩然和匠は、学問好きのこの与助を可愛がり、寺男の勤めを少々怠っていても咎めたりはしなかった。与助は色が黒く小柄だがみるからに敏捷そうで、鍛えた軀つきであった。彼の前歴については秋成は何もきかなかったし浩然の他は僧達もほとんど知らなかった。しかし過去に何かよほどの事があつて寺に身を寄せているらしい事は秋成も何となくわかった。以前は武士だったのだろうと見当もつけた。

その与助がいちずに目を輝かせ、いつも秋成の真ん前に座をしいて話を聴いていた。

ところで、実法院には秋成の二十二通の手紙がのこされている。それによって彼のこの当時、つまり晩年の極貧の暮らしがわかるのである。内容は例によって自身の老衰を嘆く文句が多いが、食べるものの事をたくさん書いているのだ。

麩を頂いて早速その日食べたが大そうおいしかった。それから好物の頭の芋を五塊も頂き、これはほんとに珍味で私にとってはまさしく春の盛宴でしたという礼状の次は、麦と蓮根の無心の手紙である。そして次の一通は好物の海苔と干大根のお礼であるが、その同じ文面でこんどはゆばの無心。

「風邪にて今に閑居のみ、近日肖像もたせ上候節ゆば十塊御たのみ申度候」とかく。近日中に容れものを持って頂きにあがる、というのである。

秋成のこの頃の食事については木村黙老が『京撰戯作者考』に、「常に芣すりて土鍋に入れて焚て喰す、菜は胡麻塩とひしこ味噌といへる二味に過ぎず」と考証している。芣米をすって玄米にし、それを煮た御飯におかずはゴマ塩と塩からいだけのいわしの味噌漬けであった。だから芋や大根、海苔などは秋成にとっては大変なご馳走であったのだ。

自分でも『胆大小心録』に「麦くたり、やき米の水のんだりして、をしから

ぬ命は生きた」としみじみ述懐している。「麦くたり」とは「麦こがし」であろう。だから小庵の壁にはり紙して「禁物、酒、肴、たばこ、油」と記してせめてもの腹いせにしたのだ。食おうにも食えぬ時、いつ「家宝」のかんしゃく丸が破裂するかもしれぬのだ。その防衛策だった。

実法院には食べ物だけでなく、衣類をねだった手紙ものこっている。

ひとえの十徳が長年の使用で破れてしまいました。もしお棄てになるような衣類がありましたら頂きたい、とかき送り「晩生の貧情さりとて恥かしく候」と嘆く。『雨月物語』が読まれても、当時は一回きりの稿料だから戯作者秋成は貧窮していたのである。

この秋成に食べものを恵むことにも与助はよく世話を焼いた。苦勞をなめてきたらしい彼は秋成が言いださなくても実によく気がついた。

ある時、和匠の許しを得て与助が一升程の皮つき麦を秋成に施し、秋成がその木綿袋を提げて境内を出かかった時、向こうから八十島某という浪人がやってきた。

ずっと以前、大通寺の今の住職順円がまだ修行時代にちょっとした危機をこの浪人に救われたことがあったらしい。偶然にその順円が大通寺の住職になっていることを知り、その縁を言いたてて寺に押しかけ居候をきめこんでいるのだがあまりたちのよくない男で、寺で酒は飲むし賭場へ出入りもしている。住職に小遣い銭も無心したりしているらしい。寺全体の鼻つまみものだが、僧も檀家衆も面と向かって出ていけという者はなかった。

この男は老いて貧乏臭い秋成がきらいらしく、秋成と顔を合わすと悪態をついていたがこの時も不機嫌に顔をしかめて、やってくる秋成をにらんだ。

「じじい、また食いものの無心か。よい加減にくたばったらどうだ」

うん、と秋成はおだやかにこたえた。

「わしもそうしたいがなかなかお迎えがこぬのでな」

「なに、お迎えなどこなくともわけはない。こんなものを食わねばよいのだ」
言うや否や、秋成のさげていた袋をひったくり中味をそこにぶちまけた。麦がそこに散乱した。

「これで願ひ通りじじいにはお迎えがくる。小鳥共はよろこぶ。一石二鳥であ

ろう」

男は袋を投げ棄てると茫然自失の秋成を尻目に高笑いして遠ざかった。あとに酒のにおいがのこった。

秋成が振りかえると、実法院の庫裏の下端、低い杉垣に胸から上を見せて与助が立っていた。八十島の仕打ちよりも八十島のうしろ姿を見ている与助の目に秋成はぎくりとした。今まで秋成に見せた事のない与助の目であった。

秋成は笑って首を左右に振ってみせた。心配するな、というつもりだった。

「あの八十島には腹を切らせましよう」

翌日二人きりになった時、与助はさらりと秋成に言っただけだ。

「腹を切らせる？」秋成は呆れて目を見張った。

「あの男が腹など切るものか」

「いや切らせるのです。あの男の先生に対する無礼は許せません、断じて」

秋成はその日は少し急ぐ事があった、与助の言う事が解せぬまま別れた。

その夜四ツ半頃、賭場からの帰りの八十島が襲撃された。

荒神社の石段の脇の石灯籠の下方から、八十島の斃れてこと切れていた所まで七、八間のあいだにおびただしい血が流れていた。屍体は下腹部を真横一文字に裂かれていたのである。

八十島の歩く半町程うしろを広島浅野家の京屋敷の中間二人が歩いていた。

やはり賭場帰りだったらしい。月の薄明かりだった。中間の一人が、前を行く背のひよろりと高い八十島の方へ何気なく目をやった時、石灯籠の蔭から飛鳥のように飛び出した黒い影が八十島の腰のあたりに抱きついたように見えた、と思った瞬間、八十島が絶叫し黒い影の上へ折り重なるようにしゃがみ込んだ。中間二人はぎょっとして一瞬立ちすくんだ。と、黒い影は左手の竹藪の方へ矢のように走り去った。

地面にえびのように軀をかがめて呻いている八十島をそのままにして二人は自身番へ走った。そこにいると自分達まで襲われそうな恐怖感を覚えた、からだという。番所に詰めていた同心配下がきた時にはすでに八十島はこと切れ疵口から臓物が流れ出ていた。

翌日秋成が寺へ行くと大通寺の僧達はその話でもち切りだった。秋成はすぐ

にその場を離れた。ふだん秋成から怪異譚を聴いている彼等は、秋成の様子が
ずい分意外だったらしい。

「先生の『吉備津の釜』の方が八十島の屍体などよりずっと気味悪いですがねえ」
と一人が言う。「そうそう、壁にべったりなまぐさい血が流れ、髻もんどりだけが軒
の端にひっかかっていた話の方がどれほど怖いことか」もう一人が応じた。

「先生、今日は話はして下さいませんか」

秋成が本堂に参り、階段を下りてくると与助が近づいてきて言った。

「一昨日の話はほんとおもしろかったですよ。またあの続きをお願いします」

その「話」というのは『春雨物語』の中の「二世の縁」である。仏法にいう
禅定で、魂こゑは捏磬ねはを得、魄はくばかり地上にとどまる死者を、土中から掘り出し、
口をしめらせ、重湯、薄粥を与えてだんだん生き返らせる話を、秋成は途中ま
でしていたのである。

秋成はそれにはこたえずぽつりと言った。

「寺男といえども仏に仕える身であろう。それが由なき殺生などして仏に相済
まぬと思わぬのか」

しばらく黙っていたがやがて与助はひどく乾いた声で応じた。

「あの男はそれだけの罪をおかしました」

「お前に何がわかる。単に死にぞこないの年寄り一人をからかっただけではな
いか。思い上がりもよい加減にしろ」

「――」

「お前はな、くそ真面目すぎるのだ。真面目なのはよいが、上に余計なものが
つく和不真面目なのよりずっと始末がわるい」

「――」

「わしはこの件については誰にも何も言わぬ。そのかわりわしの前にはこれっ
きり現れんでもらいたい」

翌日、姿を消した与助が再び秋成の前に現れたのは、文化六年（一八〇九）
六月二十七日に羽倉信美邸で秋成が息をひきとる三日前であった。秋成は与助
の顔を見ると、黙ってただうなずいた。与助はその手をとりぼろぼろ涙をこぼ
した。

養女の慧遊尼や旧い知己の紫蓮尼と共に、彼は師の枕元に詰め最期を看取っ
た。

死の数日前に羽倉邸にひきとられるまで、秋成は筆墨を離さなかった。『胆
大小心録』『異本胆大小心録』が完成し、『春雨物語』の最終稿本ができ上
がったのは、この年の夏、五月であった。

南禅寺草川町に秋成の墓がある。

秋成自身が死ぬ七年前に建てた寿蔵の場所で、彼は火葬のあと此処に葬られ
た。ただしこの墓はその十三回忌に弟子達によって新しく建てられたもので、
「上田無陽之墓」と隸書で刻まれている。この墓の建設にも与助は中心となっ
て働いた。

彼は秋成にひどく心酔していた。それは秋成の古代史の知識とその人間臭さ
に対する憧憬であった。『春雨物語』の、土佐の国司の任を終えて京へ帰って
くる紀貫之の海賊とのやりとり、一以って之を貫くというその名前の論語から
とっている由来など、秋成の口から聞かされると、与助は得体の知れぬ興
奮を覚えて胸がふるえた。

実法院の浩然上人や大通寺のご住職の法話も時々拝聴するが、これは退屈な
だけで少しも心に響いてこなかった。申し訳ないが立派すぎて実感がないので
ある。が、そこへいくと秋成の話には生きている人間がいた。土佐でわが子を
失った貫之夫婦か何かにつけてわが子をしのび、歌を詠む気持ちはよくわかる
のである。

そしてそれ程の学者でありながら秋成は、半面気弱で、いつも死にたい、死
にたいと口走る。かといって自殺したりは決してせず、それどころか時にはぎょっ
とするような生臭さを見せるのだ。たとえば実法院の僧法全さんにあてた手紙
など。与助はそれを法全さんにみせてもらったが、

「今年中ニハ閉目アランカト甚ダ喜ハシク早天ニ雨ヲ祈リテ死期ヲ俟まちノミ」と
書き、別のものには「死神に見はなされたか老の春」となかなか死なせてくれ
ぬ死神をうらんでいるのだが、そうかと思うと、老いても涸かれぬ、性へのあこ
がれをあからさまにしるしてみせるのだ。書くことで性への妄執をつき放して

いるのだろうが、北条政子と畠山重忠の性愛場面、源義経と建礼門院徳子の歓楽の一夜の詳細な描写など何ともみずみずしいのである。

その筆の跡をたどる度に与助は「無腸」という秋成の号がなぜか頭にうかんできて仕方がない。無腸は蟹である。横歩きする蟹が秋成は大好きだった。

(参考) 『この生・この死』 立川昭二著 筑摩書房

(『病いの文化史』 立川昭二著 新潮選書)

(『雨月物語』 水野 稔著 明治書院)



第二十四回春の芸能祭のご案内

日時 平成十六年五月十六日(日)

午前十時から午後三時三十分まで

場所 サンホールやまさき(山崎文化会館)

主催 山崎町文化協会・山崎文化会館

後援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、
ご案内申し上げます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎謡曲同好会

山崎郷土芸能保存会 山崎邦楽邦舞研究会

さつき民踊グループ 播州山崎太鼓

バンブー・ファイブ 山崎町老人大学

直木賞作家 宮尾登美子さんの講演を聞いて

藤井久子

(山崎町五十波)

私は最近、直木賞作家の宮尾登美子さんの講演を聞く機会を得て、大変感動致しました。

宮尾さんの生地は高知市で、兄さんと二人兄妹でした。お父さんは芸子の置き屋をされていました。今でこそ差別もなくなり、人権も確立しつつありますが、その当時はまだまだ遅れた時代でしたので、そのために差別を受けてみじめな思いをされたようでした。

宮尾さんは女子師範附属小学校を卒業され、高坂高等女学校にすまれ、卒業後、大東亜戦争の最中でしたので、徴用で軍需工場で働いておられました。

その時、お父さんが徴用のがれに、学校の先生になったらどうかと言われ、七才で田舎の小学校の裏付け代用教員として奉職されました。給料は十五円、下宿生活でした。一年生担任で、教える事もわからず子供と一緒に楽しく遊んだだけの印象しか残っていないと言っていました。

その後、裏付け期間が終って、かりやま国民学校に転動になり、そこでも一年生担任で子供と共に楽しい日々を送られました。

丁度その頃、結婚話があつて、そこに勤めておられる先生と結婚され、翌年長女が誕生されました。ところが、主人は満州開拓団に派遣されることになり、主人と共に満州に渡られました。

一緒に行った人達と共に、土地を開拓するために一生懸命働いてどうにか食べて行くことができましたし、開拓団員の小学四年以上の子供は寄宿舎に入って給食もありました。然し、戦争が激しくなるにつれて食糧不足になり、給食も続けられなくなり、最後は仕方なく「海ゆかば」を歌ってみんな泣き泣き別れになってしまいました。

その後、中国人の暴動が起り、宮尾さんの宿舍がおそれそうになった時、近くに住む中国人が「ここへ隠れなさい」と親切に隠れさせてくれたので、やっと命をとりとめる事ができました。しかし、食糧はだんだんなくなるし、

飢餓の状態で、白い敷布で家族の着物を縫い、いつ死んでもよいという覚悟はできていました。

しばらくして、炭坑のあった所へ移り住む事になり、不思議な縁でそこで教え子と再会する事ができました。そこには幸なことに関東軍が倉庫の中に大豆を忘れていたのです。その大豆を油でいって袋に入れて売れる事を教え子から教わり、教えられた通り油でいって袋につめ、一個十銭で売りその中の一銭はお札に子供に払われたそうです。子どもながらに生きるために考えだした知恵に感心すると共に、生活力、生命力の尊さを教わることができて、大変有難く、心から感謝されました。

幸にして昭和二十一年、日本に帰還することができました。ご主人の家は農家でしたので馴れない仕事をされているうちに肺結核になられ部屋の二階で床に臥せられて淋しい日々を過ごされていました。

或日、満州の教え子だったりん太郎とせい子兄妹が、引揚げ船で帰ることができたと言尾さんを訪れ、元氣づけ励ましてくれた、どんなに勇気づけられたことか、教え子の有難さをひしひしと感じさせられたと言われていました。これはやはり先生が子供たちに優しく、真心をもって接しておられたからだと思えました。

その後、宮尾さんは三十六才で文芸活動に入られ「連」「權」「一絃の琴」「序の舞」「松風の家」等多くの入賞作を書かれ、今は「宮尾本平家物語」を発行されています。

宮尾さんが若かりし頃生死をのり越え、苦難の道歩んでこられた精神力が多くの傑作の原動力になっているのではないかと思います。

今は、暇さえあれば何処にも行かず、書齋にとじこもってひたすら書く事に没頭しています。その事でした。七十七才とは思えない若さで、いつもでもやる気をもって活躍されているバイタリティーな宮尾さんに接する事ができ、私もそのパワーを頂き、いつまでも元気で心豊かに生きていきたいと思えました。

著者のプロフィール

藤井久子 (ふじい ひさこ)
1919年12月4日、山崎町五十波に生まれる。
1938年3月 山崎高等女学校を卒業
1939年3月 京都高等女学校専攻科卒業
1939年3月～1969年3月 郡内小中学校勤務
1969年3月～1975年3月 道谷、神野、蔦小
学校教頭を勤務
1980年3月 安富北小学校校長退職
退職後はいろいろな趣味に生きている

短歌

よろこびもかなしみも

歌に託して

山崎歌人協会 森本 萬千子

平成十四年十一月二十七日、県立美術館に於て、山崎歌人協会代表、

稲村幸子様が、兵庫県より「ともし

びの賞」を受賞された。この賞は、

長年にわたり短歌の創作に取り組み

その普及・発表に努めると共に、山

崎歌人協会の代表として、後進の育

成、指導に貢献するなど、永年にわ

たり地域文化の向上に尽くされた業

績に対する受賞である。稲村様は、

昭和七年山崎歌話会の創立に参加さ

れ、爾来七十有余年作歌を継続、月

例歌会では、いつも適切な批評や指

導をいただいている。又老人大学か

しわの短歌でも、月々の例会で指導

をされ、更に各町持ちまわりの宍粟

郡民短歌祭（十五年で二十二回）に

於ても、評者として後進育成にあた

られた。

私共は、新春歌会に、それぞれ、

祝歌を詠みお祝いとした。

。祝ひつつまなびゆきたし師の君の
若き心をともしびとして

嶋田 純孝

。卒壽越えなほ短歌作りはげみます

君に学ばむ初心者われは

城内 悦子

。三十一文字に執して長く文化の灯

ともしますます君をうやまふ

森本萬千子

。七十年短歌を究めて大いなる賞受

けませば祝ぎ奉らむ

山崎 智絵

ともしび

ともしび

灯

この灯はあなたがともした灯

あなたが守りつづけた灯

あなたの仲間たちが受けついで

きた灯なのです

それは人生の絵模様のなかで

きらめきかがやく光を

放ってききました

ながい長い人間の歴史の中で

風が吹きささぶ嵐の夜も

乱舞する雪の中でも

この灯は消さずにきたのです

この小さな灯

人知れずともされた灯

道に迷いさまよい歩く人たちに

人の世に失望した人たちに

それは大きなよろこびを与え

勇気を培ってくれました

暖かい光と炎

この灯の主この灯を守りつづけ

うけついできたのは

あなたなのです

あなた達の仲間だったので

仄暗い会場の燭台に一燭ずつ灯が
点されてゆく中を、この詩が静かに
美しい韻律をもって流れてきました。

感動深いひとときでした。

賞状を抱きて居並ぶ階段に

扇港の潮風が韻る 幸子



各地短歌祭入賞入選作品

(平成十五年度)

◇第二十二回穴栗郡民短歌祭

(九月七日・センターいちのみや)

・一宮町文化協会賞

たはやすく言ふも酷なるがんばれ
を友に残して病室を出づ

伊東まさ子

・ハリマ農業協同組合長賞

向き合へる座席の乙女白魚の絡め
るごとく受話器弄る

中田 博子

・穴栗郡歌人連盟賞

うらはらにも言ふ君はひきよう
者肩並べつつゆく雨のキャンパス

岸本 友宏

台風に追われるごとく帰りゆく子
らの路線をテレビに見話む

久保みや子

しまひ置きし時代おくれの大火鉢
遊び心に蓮を咲かす

小林 郁子

◇平成十五年度西播磨短歌祭

(十月十五日・西播磨文化会館)

・兵庫県芸術文化協会賞

この一票必ず生きよと祈りつつ力
をこむる鉛筆の文字

進藤てる子

◇ふれあいの祭典短歌祭

(十一月十五日・姫路文学館)

・兵庫県知事賞

癒えし夫が育てしトマトの初生り
をとびきり赤き色もて描く

岡本 光代

・姫路市文化振興財団賞

鉄棒に足掛け回る子と共に風もそ
このみくるとまわる

山本 正子

嶋田純孝氏の

ご逝去を悼む

栗山節子

。何処ともなく木屋の香る朝存へて
退院の正門を出づ

。大病を克服され退院のよろこびを
歌に託して霜月歌会に出席された。

然し十五年三月遂に故人となられた。

。胸診をする看護婦のその髪の毛を
撫づれり女の香とおもふ

。介抱の妻の老をも感じつつ再起一
度と今日は思ひぬ

。お見舞の菜の花は菜の花の色をし
ていのちを咲かす今年春くる

先ず遺詠三首を掲げ在りし日の面

影を偲び歌の足跡をたどりた。

嶋田氏と短歌の出会いは妻の病氣と
義弟の死がきっかけとなり、平成九
年歌話会と国民文学に入会、七十歳
からの遅いスタートであった。

。声あげて夕餉に呼ばふ妻の声つく
つくぼふしの鳴く向ふより
。干瓢の白きすだれに遮られ麦藁と
んぼ引き返したり

。ゆっくりと歩けば秋がよく見ゆと
足病む妻のうしろからの声

。野稗ぬく一步一步の水の面を揺れ
つつ日輪われに付きくる

。巡りくる季を待つより去る日目を
惜しむ手をもてカレンダ―剥ぐ

。山路這ふ沢蟹跨ぎ水音を聞きて訪
ねし家不在なり

これら一連の歌には人生晩年の哀
愁が漂い数々の受賞につながった。

。今日こそはひとり無心に過さむと
鉢巻きしめて竹を割りたり

。青竹を割りつつひとり遊ぶ時言葉
はいらぬ香につつまれて

竹細工にも堪能でその作品と歌は
素朴で温かく心に沁みるものがある。
最後に追悼歌をあげご冥福を祈る。

追悼歌

山崎歌話会

。御遺族の御悲嘆思ひ涙しつ一人の
部屋に黙祷ささぐ

。温かく心直ぐなる君の評歌会の席
に和みしものを

。みほとけにつむり撫でられ在しま
さむ「善哉善哉」純孝信士

。菜の花とお地藏さまの歌思ひ出づ
彼岸も花の咲きてゐますや

。竹細工のことあのこともこのこと
も聞きたかりしに最早在さず

。にこやかにためらひがちに歌評せ
し声かも聞こゆ君の写し絵

。弥陀の掌に聴きあし君か甲辞の声
に応えるごとき散華を見たり

。「ありがとう」の別れの言葉を聞
くにつけ人の道をば全うされし

。湧き出づるさまに良き歌詠みまし
ぬお浄土にても詠みて下さい

。君がゆく黄泉つひら坂春の花咲き
満ちてあれ風香れかし

。御遺族の御悲嘆思ひ涙しつ一人の
部屋に黙祷ささぐ

。温かく心直ぐなる君の評歌会の席
に和みしものを

。みほとけにつむり撫でられ在しま
さむ「善哉善哉」純孝信士

。菜の花とお地藏さまの歌思ひ出づ
彼岸も花の咲きてゐますや

。竹細工のことあのこともこのこと
も聞きたかりしに最早在さず

。にこやかにためらひがちに歌評せ
し声かも聞こゆ君の写し絵

俳句

雛流しを訪ねて

四月十九日九時二十分集合。今にも空から涙がこぼれ落ちそうなお天気だったが幸いこぼれず有難かった。

吟行地の龍野へ向う。龍野総合庁舎の裏手あたりに当たるのだろうか、土手には遅桜が淡く臆たけて美しく咲いていた。土手を降りると揖保川の清流に出る。大勢の人が往き来しておられた。甘酒の接待もあったようだ。

人形供養もあるらしく、お雛さまや人形が山のように積まれてあった。正面に稲畑汀子先生が椅子に腰かけておられた。汀子先生は、高濱虚子先生のお孫さんに当られる。その頃より空が陰しくぼつりぼつりと雨が降りかけた。

係りの方が、雛流しの雛を一人ひとり手渡しで下さる。流しやすいうちに河岸まで石段が低く造られてあった。屈んで雛を一人一人流す。川の中へざぶざぶ入り流される人もあった。別れを惜しむかのように雛は幾度も

山崎俳句協会

青嶺句会 芦田八重

も幾度も往き戻りつつ岸を離れてゆく。

・王朝の絵巻を今にながし雛

栄子

・流さるる雛の泪か小糠雨

とみ代

・城下町小雨に煙り雛流し

光子

・雛流す小さな姉が手を貸して

光栄

美しく着飾った幼い姉妹が目をひく。

・流し雛しぶきを顔に川下る

千代子

・雨光る流し雛の白き顔

チェノ

・晴着きて雛流しをり揖保の川

美保子

・航くさきの幸を祈りつ雛送る

千里

・積み上げし供養人形春惜しむ

泊水

・汀子師にまみゆたかぶり春の雨

君子

つまずきながら流れゆく雛、急流にそうて流れる雛、波に雛をあずけところを残しつつ雨にけむる揖保川を後にする。雛との小さな別離だった。

・雛流す揖保川けむる雨の中

八重

山脈句会詠草

古文書の晦渋かひじゆうに倦うむ夜寒かな

浅田 蕪耕

一望の植田の景や祈りあり

池田 陶瓦

忘れ潮いだきて葦の枯れ急ぐ

宇野 幸子

出講の夫の帰りを待つ夜長

大西 敦子

松山にて

白萩や声揃へ読む子規の句碑

岡田 瑞穂

娘の車見送り蟲の深き闇

田中 恵

梵鐘の余韻長閑に暮れにけり

畑林 和枝

藪椿夕べの雨を零こぼしけり

福田 祥栄

日溜りは母のぬくもり返り花

前野さつき

小春日や竿売る声を遠く聞き

三木彦左エ門

病む妻の背に手を添へて凍の道

横江 柏峰

さわらび句会詠草

北窓を開き川音近づきぬ

山岸その子

囀りに緞の手を止む山の鳥

小林 紫生

鴉らの何たくらむや万愚節

本條 淑子

花の雫見てをり傘をふれ合ひて

壺阪加代子

茶筌振る無心の刻や梅雨深み

山中 正子

烏賊干して秋の浜辺の波白く

庄 昌子

ひそと来て木洩日掬ふ秋の蝶

川崎 栄子

秋水や母の来し方写しをり

藤井 七代

水槽の水母が夢をみる月夜

薄木満寿恵

朱倫句会詠草

我が五感春の嵐へ晒しおり

藍 千恵

秋風や小さき村の売家札

井口 洋子

山紫陽花色をのこして枯れのこる

構 よしえ

榎榎酒の種噛み砕く一瞬の野性

神 風宣

夕昏れの芒無言で立っており

木村今日子

極楽へ切符持ため手菊挿し芽

小島 弥生

夏霞山を遠くに置きにけり

佐倉 涼子

胎内にゐるがごとくに青葡萄

鈴木多恵女

木下闇御朱印帳に滲む墨

千種 洋子

さくらんぼ年ごと小さくなりけり

中津 洋美

ひまわりのどちらに向いても鬼ばかり

ひいな蒲公英

かなかなよ子は泣きつかれ夢疲

藤井 弥生

同じ道二人歩いた芙蓉坂

福井 清翠

旅でなら母に逢えます秋遍路

三浦 ゆき

独りでも群れても貴き曼珠沙華

三浦 鮎子

百日紅想い小さき胸のうち

吉田 弘子

長月の播磨の山に水が湧く

空木 章

近づけば一目散の目高かな

大西 清吉

ハーケンが打ち込んである冬の滝

小林 優

藁葺きの御堂のこりし青田風

鈴木 亮

はぐれ火やこの世の果てまで蝉しぐれ

中原 俊

夏蝶と視線交える峡ぐらし

福井 泰好

高僧の茶軸の難字小春風

宗平 岳峰

素粒子の蓋に手を置き黒揚羽

岸野 皓午

青嶺句会詠草

雛流る雛の国へ向ふべく

芦田 八重

葉桜を天蓋に座す石佛

秋久 光子

蛩落つ小溝の水の迅さかな

秦 千里

詫び事の筆抄らず梅雨深し

石野 光栄

一族の夢泳がせて鯉鱖

小畑 ぬい

菜の花の一株残る畑かな

坂本 知佐

告げられし手術待つ夜のそぞろ寒

下村 君子

暖かや島から島へ遊覧船

杉山美保子

癒されて葉桜の旅思ふまま

田中 良子

客去りて座敷ひっそり盆の月

鳥羽チエノ

古里と云へど墓参に帰るのみ

永井とみ代

垣のなき峡の四、五戸や秋桜

山口 栄子

初写真年毎髪のうちれ見ゆ

和田千代子

木洩れ陽をゆらす葉桜万華鏡

三浦 ゆき

鳳仙花日照雨にこぼれ土匂ふ

福田 泊水



第二回 山崎能

山崎謡曲同好会

三谷恭三

平成十五年九月六日(土)山崎文化会館に於て、第一回山崎能を開催致しました。昭和五十五年より山崎八幡神社新能として、隔年に催してきた行事をこの度多くの皆様の御協力と、行政の力添えも得て、装いを新たに出演することが出来ました。おかげ様で満員の観客に恵まれ、大好評のうちに終えることができ、実行委員会のメンバー一同心より感謝申し上げます。

今回の演目は、観世流能楽「藤戸」をシテ杉浦元三郎師、ワキ江崎金治郎師他に、大蔵流狂言「伯母ヶ酒」を茂山千五郎師他に、観世流能楽「殺生石」をシテ杉浦豊彦師他にそれぞれ演じていただきました。いずれも当代一流の演者の方々に、その至芸はもろろんのこと、装束の素晴らしさにも多くの皆様に、感銘を得ていただいたことと思います。

ご承知のように能・狂言の歴史は、鎌倉時代末期から興って以来、八〇〇年の歴史を重ね今に至っておりますが、日本の誇る古典芸能として、今や世界に広く知られ、国内でも年

間に何百という演能の会が催されております。この宍粟郡にも戦前より能楽特に謡曲に親しむ風土が色濃くあったようで、戦時中の一時期を除いて各地で謡曲の会が催され、多くの「名人」といわれたアマチュアの先輩方を輩出してきました。

そのような先輩方や同好の方々が、山崎八幡神社境内にある元禄年間創建の能舞台に目を止められ、奉賛新能として勧進を始めたのが、この「山崎能」の前身の「山崎八幡神社新能」でありました。特に観客に無料で公演を提供するという試みは、全国でも数少なく、この精神は今後も山崎能として可能な限り引き継いでいきたいと思っております。

日本の誇る伝統芸能をより多くの人々に提供し、宍粟郡の文化振興並びに観光振興にも役立つことを信じて、今後もこの行事が絶えることのないように頑張っていきたいと思っておりますが、望むらくは中学生高校生を始めとする若い人たちにもっと興味を持って、将来を支える力になってもらいたいと願っております。



国際社会に思う 子供達への伝統文化

邦楽邦舞研究会 勝部 由美子

(阪東 翔鶯)

十一月三日、今年も秋の芸能祭が好評の内に終わりました。毎年ながら、山崎町姉妹都市のスクイム市から来日された皆様も、この芸能祭を鑑賞されていました。本当に国際社会になったと、改めて感じています。が、その中で日本の伝統文化、芸能を日本人として、子供達が胸を張って「私の国は、こんな素晴らしい文化が有ります」と紹介出来るのだろうか、これから出て行く国際社会に、そんな子供達が育っているのだろうか、無いとは言えませんが、数少なく残念ながら悲しい事です。私は日本舞踊を二十余年指導していますが、この世界でも伝統文化の伝承の危機を感じてきました。近年になって、やっと文部省が伝統芸能を、学校授業に取り入れた事は、この芸能を愛する者にとって救われる思いです。まだ今からですが、一つの糸口になると思われる民舞「南中そーらん」は、全国の小、中学校で踊られています。メディアから注目され、郡内でも多く取り入れられています。私が指導させて頂いた学校も三校あり、体育祭や文化祭など、「そーらん」が大活躍です。指導して感じる事は、多々ありますが、その中で子供達の瞳の輝きは、素晴らしい物があり、日本人の「心」の奥底にある民俗性を揺さ振られているのを感じます。やはり三味線の旋律、和太鼓の響き、民舞の心、「ルーッ」を感じ取る事だと、思えてなりません。踊り終えた一人ひとりの顔には、日本に生まれて良かった、と言う顔をしている様に思え嬉しくなります。「もっと踊りたい」の声を聞く都度、「もっと伝えて行きたい」と思いますし、又これを機会に「和」の文化を肌で感じ受け止め、大切に伝承し、この思いを一人でも多くの子供達が、社会、世界に胸を張り、飛び立ってほしいと切に願うのです。微力ではありますが、お手伝いさせて頂いたらと思う今日です。

バンブー5 結成十年の軌跡

バンブーファイブ 前野弘幸

バンブー5も平成六年五月の結成から、早いもので十年目を迎えました。

私は結成当時のメンバーの中に、いなかったのですが、バンブー5の初舞台は、十一月三日の秋の芸能祭で、その翌年には、結成当時のメンバーには忘れられない咲ランドでの演奏（皆様のご想像にお任せします…）があったそうです。

私がバンブー5に参加させてもらったのは、結成から一一年経ってからです、私のバンブー5の初舞台は、山崎中学校のブラスバンド部と共演した七夕コンサートでした。

それから、私が参加しただけでも、城下小学校のふれあい祭、加生公民館での敬老会、波賀町の観月会、さつき祭、大歳神社の藤祭、文化会館の春の芸能祭、ダヴィンチでのスクイム市歓迎セレモニー等多数の舞台に出演させて頂きました。

他にもここ数年定着してきた春の随陽寺の観桜会、夏の商店街の土曜夜店のイベント、十一月三日の秋の芸能祭、十二月のサンクスでのクリ

スマスコンサートと定期的な演奏活動をしています。

演奏をする曲も演歌、映画音楽、その年の流行の曲等さまざまな曲を演奏してきました。レパートリーも百曲程にもなりました。その中でもここ数年は、「キャラバン」「A列車で行こう」等のジャズのスタンダードナンバーにも取り組み各自のソロも織り込むなど技術の向上にも励んでまいりました。

このように十年間同じメンバーで続けてこられたのも、各自の音楽に対する情熱とチームワークだと思います。来年の六月には、十一年目を迎えますが、更なる飛躍の年にしたいとメンバー全員意気込んでいます。最後になりましたが、バンブー5のホームページがありますので是非ご覧になって下さい。
<http://moon.gaix.com/home/bamboofive>
皆様のアクセスをお待ちしております。

いけ花

山崎茶華道協会

中村悦子



友人のすすめで花の稽古に通いはじめてからもう何年になるでしょうか。当時は今のよう材料を花屋さんで買うのではなく、自分でさがして持参していました。週末になると近くの川原や野山、畦道を歩きまわったものです。だから、この季節には、どこにどんな花が咲いているか、どんな木の芽が吹いているかが分かっていたのです。自然はいつも季節毎に姿をかえて私を楽しませてくれました。

今日では、どんな花でも花屋さんで求める事が出来ます。これは、大変便利で結構な事です。自然の移り変わりを知る美意識が薄れる原因となっているのかもしれませんが。

いけ花を習い覚えるには、まず花を知り花の扱いを知り、次に生ける技術です。でも大切な事は、花を生きたいという花への想いです。

折りがあれば自然の環境に接し、あるがままの花のたたくまいに触れ

て感動する。そして、脳裏に焼きついて離れないような花との出合いを積み重ね、花への意欲を高めるのです。

私たちは、慌ただしい毎日にも、ともしれば心のゆとりを失いがちになります。そんな時、花瓶に入れた一輪の花がどんなにかやすらぎを与えてくれることでしょう。どんな花でも、生ければ心がなごみます。どんなに飾りたてた生活でも、花のない部屋は味気なくさみしいものです。

技術を要する伝承いけ花には、それなりの大事な役目と働きがあります。目的に合ったものを格調高く生けるための技術の追求は勿論大切ですが、自然に親しみ、花を愛する心を持ち、自分の想いを花に託している「いけ花」は、心のレクリエーションです。そんな潤いのある毎日でありたいと願っています。



新しい新芽が大樹

に育ってほしい

山崎囲碁同好会

松本明

山崎囲碁同好会では、今年も六月と十一月とにそれぞれ第四十四回目、「さつき祭り囲碁大会」「菊花囲碁大会」を開催いたしました。これ等は、囲碁をこよなく愛する諸先輩たちや同好の諸氏の熱意と努力によって始められ、永年に亘り続けてこられたものです。こうした歴史の上に夫々が切磋琢磨し、研鑽され、今では県代表クラスの実力者やそれに続く強豪が数多く育ち、県下でも有数の囲碁の雄町と言ってもおかしくない現状であります。

しかしながら、これが、将来的にどうかというと、残念ながら安心してきる状態ではないのです。それは、後に続く若者がほとんど育っていないからです。

現在囲碁を楽しんでいる多くの年配者達が、碁を始めようとした頃と現在とでは、経済的にも環境的にも大変な相違です。時代の移り変わり

とともに、若者たちの時の過ごし方も、パソコンの普及とともに年寄り専科と思われるがちな囲碁に、若者が目もくれないのは当然の成り行きであったと思われれます。ところが最近になって、「ヒカルの碁」というアニメ番組の登場で、多くの子供たちが囲碁に興味を持つようになってきました。とてもうれしい大きな変化です。

山崎町内でも、すでに幾人かの子供たちを、碁が楽しめるように育て指導して下さる方ができてまいりましたが、本誌の前号にも書いておりましたが、スポーツ21の子供囲碁教室でも、何人かは育ちつつあります。

この度、好機到来と見て、十一月三日の菊花囲碁大会に山崎囲碁同好会では初めて、「子供の部」の併催を試みました(その結果は十一月五日付け神戸新聞メールBOX欄に掲載)。世話人一同、大感激でお世話をさせていただきますのは勿論です。この新しい芽を大切に、大きな立派な大樹に育てたいと心を新たにいたしました。

山崎植物同好会の活動

山崎植物同好会 鳥越茂

山崎植物同好会は昭和六十年に久宗会長が生物の先生を中心に研修の場として立ち上げて以来、十八年になります。ほぼ月一回郡内の草花や樹木を観察して、百五十八回になりました。会員は九十八名で年齢層は五十代以上が多数を占めています。平成十五年度は郡内の巨木を観察

することをテーマにしました。巨木は多くの木が倒れたり、切られたりした中で、数百年を生き抜いた、その生命力に感動を覚えます。と同時に大事にして、次代に残していくたい気持ちにさせられます。

同年の観察地八カ所の中、二カ所を簡単に紹介させていただきます。安富町関のヒメハルゼミは県内でも生息地が限られている珍しい蝉で、鳴き声もなかなか聞けないのですが運良く聞くことが出来ました。波賀町小野の大トチノキは国有林の中にあり、二本並んで巨木が立っています。台風の後でトチの実が沢山落

ちているはずでしたが、すでに拾われており、ほとんど残っていませんでした。専門に集める業者がいるようです。

私達の会は郡内の植物や生物の生育環境も知ることが出来る有意義な会として、今後とも活動を継続していきたいと、考えています。会長の久宗丑雄先生や植物以外にも博学な内海功一先生、会の運営に指導いただいている理事の方々にも引き続きご協力をお願いする次第です。



人生七転び八起

さつき民踊グループ 西川 慶子

子育てと仕事（理容）に追われ、趣味の一つもない私に二十数年前でした。さつき民踊グループで楽しまないかと声を掛けて頂き、会員の方々が三、四曲習われるのに一曲でも踊れるようになりたいと軽い気持ちで入会させて頂きました。その後やっと発表会に出演出来る日を迎え、はじめて息子に送り迎えをしてもらい、こんな幸せないと思っていたのも数ヶ月。その年に突然の事故でその息子を失い、後を追う事しか考えられない日々が続いている頃、山崎教室のおかげこの日にはいつも故大谷先生が顔を見せて下さり、元氣付け励まして立ちなおらせて下さいました。そして私に踊る楽しみ、ボランティアに行く事までしっかり教えて下さった。それから数年後大谷先生が亡くなられ又ショックで踊る事すら忘れる思いをしましたが、その大谷先生が孫三人に舞台上立つ事、踊る楽しみをしっかりと教えて下さっておりましたので、さつき民踊グループはどうしても残したく、旭町の大谷つる

え様のお力をかり師匠のない春の芸能祭、秋のふれあい文化祭を務め、大変苦しい年もありましたが、阪東寿賀幸（岸本幸子）先生にお出合い出来まして今日お世話になってます。

会員一人ひとりが助け合い、励まし合い、心と力が一つになった踊りが出来たらと心掛けておりますが、なかなか気持と手足が動かないのが悩みです。岸本先生にはしんどい思いをさせていますが、先生の心のやさしさにあまえず、頑張り続けたいと思っております。私宅だけでなく会員一人ひとりの家族の協力を感謝し、おけいこに励み元氣で年をとりたいと願っております。



町民合唱団の移ろい

山崎町合唱連盟

藤井 七代

この春ごろ、元々少人数の合唱団の人数が減り始め、あれこれ試行錯誤の末、YOBの片山澄之氏、特に準指導者ともなる奥野昌子様他団員の方の協力のお蔭で最低人数も整い気分新たに合唱を続けていく気運になりました。文化の日第十三回「秋のふれあい文化祭」には指揮者栗山祐子先生伴奏長井美江先生により例年の如く出場。丁度スクイム市長他の方々が正面席におられ軽く手を挙げて下さり嬉しく思ったりしました。

昭和四十五年頃、山崎町社会教育の一環として誕生した混声合唱団が基でそれ以来「町民合唱団」の名を大切に長年歌ってきました。団員の努力精進は勿論ですが、是迄指導援助の諸先生のおかげと感謝しております。又、此処数年間合唱の基礎力を高めて下さいました指導の塚田美紀先生に心より御礼を申し上げます。ありがとうございます。

活動の内、特記すべきは、
◎第九合唱団が編成され、山崎文化会館での歳末公演に大阪教育大オー

ケストラの演奏で「歓喜の歌」を合唱。

◎スウェーデンのシンスカテイヴァリ市夏祭りに、神戸女学院新田英開先生、ピアノストのオットー・フロイデントール先生の御縁を頂き、渡欧。現地のワークショップを見学参加。雨の野外会場での合唱。四頭立馬車の先導する中世的なパレードに参加。その後ロマンティック街道の終点ドイツフュツセンのノイスバンシュタイン城を観光。

ワグナーに傾倒した皇帝ルードヴィヒIIの水死したとされる湖を望む尖塔の一室で歌う事を許可され「箱根八里」を合唱、外国人の観光客より拍手を頂く。

◎山崎町姉妹都市スクイム市灌漑用水百年祭に参加、あちこちの施設で合唱する。カナダ・バンクーバー市のバグパイプ隊の先導するアメリカらしいパレードに参加。

いずれも町文化協会役員の方の援助を受け、当時の教育長小畑欽之助様の協力を賜り、町民合唱団が呼びかけの中核となり、町内外の多数の実力ある方々の参加を頂き、初めて実現したものです。これは今もって虹の彼方の不思議な出来事としか思えません。関係の方々には御礼申し上げます。

詩を吟じ炭を焼く

山崎詩舞道連盟 小田博己

永年お世話になった方への退職挨拶状に「第二の人生は、詩を吟じ、田畑を耕し、仲間と炭を焼き、感謝と報恩の心で過ごしたい……」と、そんな思いを記していますが、以来四年の歳月が流れた今、内容はともかく、そのとおりの過ごし方をしております。

私の好きな漢詩の一つに

對 酒 白 居 易
蝸 牛 角 上 淨 何 事
石 火 光 中 寄 此 身
不 隨 隨 貧 且 歡 樂
開 口 笑 是 癡 人

まさに、デンデン虫の小さな角の上で争っているようなことが一般に多いことか……一考を促す詩といえましよう。

詩を吟じるとき、忘れてならないのが、腹式呼吸です。この呼吸方法は、吸うことよりもはくことに重点をおきます。効果は、いろいろあるようですが、血液の循環を良くし、血圧を下げる。排泄、排便を良くし、気持を落ち着かせ病気を出しにくく鬱病にならない等々の効果もあるよ

うです。只、私は十数年前にこの腹式呼吸による発声を誤ったために、喉頭ポリープを患う苦い経験があります。

かつては、何百といいた会員も随分減少し寂しくなりましたが、趣味と健康の上から吟じ続けたいと思っております。皆さんも是非、仲間には

もう一つの炭焼きは、この年になると昔のように囲炉裏を囲む生活が非常になつかしく仲間と談笑の中から、「ヨシ、ヤロウ」と立ち上がりました。窯は九十六才の伴左エ門さんの指導を受け、その名も「伴窯」と名付け、現在十一名の山男達と炭を焼き、囲炉裏を囲んで人生を語り、時には、盃を酌み交しております。詩を吟じ、田畑を耕し、仲間と炭を焼く、まさに悠々自適のくらしが出来ることを、この上ないよこびと感じております。



自然の美しさに憧れる気持ちは、いつの時代でも変わるものではありませんが、特に最近のようにめざましく文明が進み、私達の身のまわりから、どんどん自然が遠のいていき、さらに失われていく今日、ともすれば、私達の心の中からさえも自然が失われていきつつあり、自然美に対する憧れはますます強いものになっています。

美の追求

播磨さつき会
田 口 實

ビルや住宅が建ち、道路は舗装され、自動車が見れば、騒音をまきちらしながら行き交い、山や林は伐りひらかれて、みどりの少なくなった土地には、小さな庭すらもない住宅がひしめきあっています。文明が進んだ私達の生活は昔に比べて、遥かに便利なものとなりました。しかし、その便利さと引きかえに失った自然がいかに大切なものであったか、今、我々は、ようやく、そのことに気がついたのです。生花は、日本の生んだ美の世界であり、また和式（日本式）庭園も、わが国の建築様式に合致した作庭の美であります。

そこに植えられている木は自然美を生かし「美の追求」によって仕立てられたものです。

盆栽の究極の目的も「美の追求」によって発展したものであり、世界に誇りうる、日本独特の芸術といえましょう。身近に、幾鉢かの盆栽を置いて、せめて、かすかな自然の営み、四季のうつろいでも味わうことができればと、そんな夢が今日の盆栽趣味につながってきていると思います。最近では、盆栽の仕立て方にもそれほど堅苦しさは要求されず、むしろあまり技巧に走らない自然態に近いものが好んでつくられる傾向にあります。

樹木、草木、鉢、器、石、コケなどを素材として、自然美を理想化して完成するものです。このことは、絵画、彫刻においてもいえることでしょう。できあがった作品が単なる模倣、模写でなく特徴を捉えて理想化して仕上げていくものだと思います。しかし「盆栽は永久に完成されることのない芸術作品である。」ことが最大の特徴と言えるのです。

趣味と私

山崎美術協会

福岡 久藏

作詞作曲家の小椋さんが、新時代を生きる方策として「好き、且つ得手」なものを身につけることだといわれます。そして、その為に必要なこととして「シンボウ」という言葉をあげておられます。

一つは「辛抱」、地味で地道な修業に耐えること。

二つは「信望」、何事も一人では果せない。先達や仲間との信頼関係を構築すること。

三つは「心房」、健康管理は常に肝要。

四つは「心棒」、自らの価値観の核心に照らして、それを行うこととの確たる鎖を意識すること。

五つは「深謀」、好きになり得手になる過程や、好きになり得手になった果ての生活について、きちんとした計画や展望を描くこと。

といわれます。言葉は厳しいですが、簡潔で要を得ていると思います。これらのことを実践に移すことがで

きればプロの領域に到達できると思っています。しかし、難しいでしょう。

でも、趣味をもつことは大切ですし、老いの生き方として、一つの有り様が示されていると思います。私など、五十年近く絵を描いてきましたが、今だに満足のできる絵が描けないでいます。恐らく、自分に対して厳しさが足りないのでしょうか。

仕事忙しいといって絵を休み、何かがあったといっては絵を描くのをやめる。また逆に、仲間から展覧会への出品を誘われると、二つ返事で引き受け自分を作品づくりに追い込んだりもします。その他、展覧会の陳列や片付けの出役だけは人に迷惑をかけられないと日程のやりくりに苦心したりを繰り返してきたように思います。

絵を描きはじめると、人それぞれに個性があるので、半年もすれば一端の批評家になれます。すると、人の絵の良さや弱点が気になり、話したいことがいっぱいでき「色が……」「形が……」となり、他人の陰口や悪口を聞くことがあります。賑々しいが楽しく、良い仲間との出会いが次々と広がることを喜びながらの日々と思えます。

平成会の十五年

平成会

前野 洋一

平成元年、バブル全盛期に結成された平成会は、今年で十五年を迎えました。わずかに十五年の間に、バブル崩壊、平成不況そしてデフレの時代へと突入しました。我が職場も郵政省から郵政事業庁そして今年から郵政公社へと変化しました。社会環境は大きく変化しましたが、生活面はそれほど大きくは変化していないようにも思えます。

この間、平成会は、会の理念である「地域社会の文化的諸問題を調査研究し、文化的発展に寄与する」との名分のもと、毎月講師先生を招いての自己研鑽、今年で十年目を迎えました、保育園、幼稚園の児童を招いての「ジャガイモ掘り」特に今年は、会の十五周年、イモ掘十年を記念して、全児童と先生方に千個以上の



コロッケまた山のようなフライドポテトを作りました。

残念ながら、予定していた日は、朝からの雨、イモ堀は出来なかった

ものの、予定通りコロッケを作り、各園に運び食べてもらいました。

また周年事業としまして、五周年には、関西学院大学の「グリークラブ」を、十周年には、和太鼓奏者「一路」を招請、また今年の九月には、十五周年記念事業として全盲のテノール歌手「新垣 勉」氏を招請し、人に優しい社会実現の一助となるよう、盲導犬普及のためのチャリティコンサートを開催し、山崎町民の多くの方々に聞いていただく事が出来たこと、また、多くの方から多額のチャリティ募金をいただき、非常にうれしく思っています。

皆様と共に、山崎町の文化がより良く発展していくよう考えながら、地域文化の発展に寄与できる団体をめざし、会の親睦と研鑽に努め運営していきたいと考えています。今後とも、ご支援ご協力をお願いいたします。



「子守り歌」をうたったことがありますか

山崎児童合唱団 塚田美紀

「ねんねこしゃっしゃりませね たこのかわいさ〜」これは私が母の背中から聞いた子守り歌です。母の子守り歌ですから、音もはずれていませんし、歌詩も母流にアレンジされて（と言ってもおぼえ違いなのでしようが）いました。祖母に背負われて聞いていたのが、「ここはおくこのなんびゃくり〜」の軍歌です。祖母を思い出す時には、必ずこの軍歌と、畑で背負われたねんねこからちよこんと首を出す私の写真です。赤ちゃんですから背負われた時の記憶などないのですが、背負われている写真がたくさんあるので、それをみて背負われていたんだなと思ひ込んでいるのだと思います。この夏休みに講演会に出かけることができました。その先生が、子供が小さい頃に母親を心の中に植えていたら青年期や大人になって非行や犯罪をおかそうとした時に母親の顔が浮かび、やめておこう、という気持ちになると言われました。私はどうすればやさしい母親を子供の中に植えつけ

られるのか考えました。やはり母親の体温のあたたかさ、やさしい声、これほど乳幼児にとって心地のいいものはないのではないかと思います。経済が先行してしまって忙しい毎日です。子育てをして家にいる母親は社会からとり残されているような孤独感でいっぱいです。働いている母親はいつも疲れています。どうか少し立ちどまって我が子に目を向けて下さい。長い人生のわずかな期間ですから。この子育ての期間をだっこして、おんぶして子供たちにたくさん歌をうたってほしいと思います。そして子どもたちの心の中にやさしいお母さんを植えてあげてほしいと思います。お母さんのやさしい声でうたえば音ははずれても、歌詞が違ってても子供にとって最高の子守り歌です。おじいちゃん、おばあちゃんにもどんどん歌ってほしいと思います。ちなみに私の長女は石川さゆりの風の盆恋歌、長男は謡曲をおばあちゃんの子守り歌として大きくなりました。

和太鼓仲間の若人にささえられ

播州山崎太鼓 上村道江

私はズーッと前から一度やってみたいと思っていたことがあります。それは思いっきり和太鼓をたたいてみることでした。ついに実現することが出来てとても幸せを感じています。

『サンホールやまさきニュース』に目を通していた時、和太鼓教室の開設が目にとびこんできました。「ヤッター、絶対に行こう!!」と一瞬思ったものの、ためらう気持ちもあり、右往左往していました。が、やっぱりデンワ。「まだもう少しくらいなら受け入れ可能です。」とのこと、一応場取りは出来たものの若人の集いだろうなあ。やはり思っていたとおり最高齢の私でした。六十の手習いと申しましょうか。

八丈島太鼓を習う時ビデオ鑑賞がありました。島の人々が楽しく演奏されている姿の中に八十才代と思える老女を見つけました。これなら私にもまだ二十年間は楽しむことが出来る、と思いました。

でも新しい曲、テンポの速い曲に

は若人の何倍もの時間とエネルギーをかけなければなりません。私が出来るようになるまで指導してください。先生や仲間の誰かが私につきそってゆっくりとしたおけいこが続きます。

西洋音楽に比重が置かれがちであった学校の音楽授業に昨年から和楽器の学習がとり入れられるようになったとか。今年から『子ども和太鼓教室』も発足されて地域の子どもたちと共に和太鼓の音が、振動が理屈なしに体中に「じーん」とくる感動を大切にして仲間の一員としてありたいと思っております。

発表の場が与えられそのステージに自分もいることは私にとって大きな大きな一ページでした。これからもよろしくおねがいします。



新潮会の歩み と現状

新潮会
安井 擴

我が新潮会は昭和二十七年に発足して平成十四年に記念すべき五十年を迎えることが出来ました。

その間に多くの著名講師を招きましたその一部を紹介しましょう。

吉川英治、中村汀女、土門拳、荒垣秀雄、長谷川如是閑、杉本苑子、辰野隆、大宅壮一、茂山千作、茂山千五郎、富田碎花、川田順、中川一政、安田青風、橋本凝胤、高田好胤、山田無文、生澤朗、森月城、戸川猪佐武、樋口尾山、山本御舟、ドクトルチエコ、辻正信、松井叔生、西木正明、大河内昭爾、(順不同、敬称略)等多くの方々の講話を拝聴し見聞を深めてまいりました。

また周年の記念事業として昭和三十七年の十周年に当時町の文化振興の拠点であった下村記念館の南側に「ラカンマキ」の苗木を植樹、昭和四十七年の二十周年記念には町役場前に「山崎町民憲章」を刻んだ石碑

を建設、昭和五十七年の三十周年には文化振興のため指定寄付し、当局は山崎文化会館オープンを記念して松井叔生画伯と嶋津和幸画伯の絵画を購入し館内に展示。平成四年の四十周年には山崎文化会館前広場に野口雨情氏作詞による「六粟民謡」「山崎小唄」富田碎花氏作詞による「山崎町歌」など刻み込んだ歌碑を建立しました。

平成十四年の五十周年には夢公園の鐘づくりに長田産業株式会社、にしん地域振興財団のご協力をいただいて記念の鐘を建立、「夢の響」と名づけられました。

新潮会の会員は平成十四年当時は二十三名でありましたが、実質の活動の人員が減少して寂しくなり会員を募ってはどうかと話があり皆さんの努力で多くの人達の賛同を得て会員数が三十五名になりました。

大正元年生まれの高井国男さんを筆頭に十六名、昭和生まれが十九名で昭和十八年生まれとバラエティーにとんだ人達の集まりとなりました。今後一層の活躍と研鑽を会員の皆様に期待したいと思います。

獅子舞に 携わって

川戸獅子舞保存会
雲田 章彦

昭和四十八年に地元に住む有志によって再結成された「川戸岩田神社奉納獅子舞保存会」は、現在自治会組織の文化部に属し、毎年十月吉日(第二土曜日)に行われる岩田神社の秋祭りに七種類の獅子舞を奉納しています。

平成十五年度は十月十二日に保存会の獅子舞と小学生有志による子ども獅子舞を岩田神社の秋祭りに奉納しました。そして十一月十四日には山崎町立戸原小学校で開催された兵庫県小学校教育社会科研究会で昼食時のアトラクションとして子ども達が二種類の獅子舞を披露し、多くの参観者から大きな拍手と称賛の言葉をいただきました。続いて十一月十六日の戸原ふれあい祭りにも保存会の獅子と子ども獅子が出演し、多くの人に観てもらったことが出来ました。このように今年度は秋祭りの奉納以

外にもたくさんのお出演機会を得ることができ、恵まれた一年であったと思います。

このような中で今後の伝統ある獅子舞を地域のなかにどのように根付かせ、後世に継承していくかが保存会の中でも真剣に話し合われるようになりました。幸いなことに自治会役員の方々の協力・理解もあり、子ども達に川戸の獅子を継承していくという一つの方向性が固まりつつあります。しかし、そのためには自治会役員以外に子ども達の保護者の協力・理解を得ることが不可欠です。

最後になりましたが、農村離れが進み人間関係が希薄になっていると言われている現在、地域の活性化・連携は、その地域に暮らす人々の大きな課題です。獅子舞を通して自分が生まれた地域に誇りと愛着を持つ青少年の育成を図り、獅子舞保存会に集う会員が人間関係をより深めていく。このようなことが獅子舞保存会の大切な役割ではないかと考えています。



1 事務局だより

◇珍しい楽器の演奏を楽しむ

山崎町生涯学習センター学遊館主催。同町文化協会後援の音楽鑑賞講座「スティールパンコンサート」が平成十五年十月二十五日午後七時から同学遊館研修室で開かれた。

阪神大震災の災害復興を、より一層力づけようと神戸市新長田商店街の人たちが中心になって結成された「ファンタスティックス」のみなさんが南米のカリブ海に浮かぶトリニダードトバコ共和国で生まれたドラム缶加工の珍しい楽器スティールパンで、「コーヒールンバ」「ラブミイテンダー」など演奏。会場いっぱい鑑賞者を心ゆくまで楽しませた。

◇伝統芸能に大感激

第十三回「やまさき秋のふれあい文化祭」が「文化の日」の平成十五年十一月三日、午前十時から山崎文化会館大ホールで開かれた。山崎町内の芸能関係二十四団体の人々と幼稚園、保育園の子どもたちが出演。日ごろの練習の成果を発表した。いづれも見事な演技とあって延べ約六百人の鑑賞客を大いに楽しませた。会場には同町の姉妹都市、アメリカ・ワシントン州・スクイム市から姉妹都市提携十周年を記念。親善交流のため来町していたシュリーブート市長ら六人も姿を見せ、演技を熱心

に鑑賞。案内を務めていた町役場職員に「日本伝統芸能の太鼓、獅子舞、日舞など見せてもらって大感激です」と話していたという。

編集後記

編集長 荒木俊介

「やまさき文化」第二十三号を贈ります。いつものことながら各所属団体からそれぞれの活動状況やその活動にまつわる感想、或は素晴らしい随想など、バラエティーに富んだ原稿をお寄せ頂き、心より厚く御礼申し上げます。

本号の特別寄稿は、郡内で初の女性小学校長を勤められた藤井久子氏にお願い致しました。一日、お宅を訪れ、お願い旁々いろいろとお話を伺いましたが、話は自然、氏が主宰されている「ちぎり絵」のグループの活動などが主でした。多くの愛弟子に囲まれた幸せそうな氏の姿が想像され、さわやかな感動を覚え帰途についたことでした。どうかこれからも益々「ちぎり絵」に精進され、ご多幸な余生を送られます様お祈り申し上げます。

浅田耕三氏の創作「蟹」は、江戸時代明和期の幻想的作家上田秋成を描いたものですが、最後の数行が秋成のキャラクターを見事に表現して

いて、流石はといった思いにさせられました。

閑話休題 二〇〇四年の正月三日、ウィーンからの衛星中継でリック・ド・ムーティ指揮によるウィーン・フィルハーモニー楽団演奏の「ウィーン・フィル・ニューイヤークンサート」を映像で楽しみながらライブで聴けたことはこの上ない感激でした。

先ずパリのヴェルサイユ宮殿を彷彿とさせる様な大ホールの豪華な裝飾に圧倒される。演奏が始まると熱演する指揮者ムーティや各奏者の姿が素晴らしいカメラワークで画面一杯に映し出される。曲は殆んどが、ハン・シュトラウスのものですが、最後は確かあの有名な「青きドナウの流れ」で、終ると演奏者席の上から紙吹雪が舞い降り、その中で再三にわたってアンコールを求める聴衆の洗練されたマナー。私は、しばし陶然。西欧文明の粋を見る思いで、文化の持つ素晴らしさを改めて実感しました。

終りになりましたが二年間にわたって表紙絵並びに挿絵で活躍頂いた片山吉恵氏に心から感謝の言葉を申し上げます。

ありがとうございます。



デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電装株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟郡山崎町今宿 98-15

TEL (0790) 62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福岡店



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答える為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社掲げて取り組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社 for happy day happy life

TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100

飛石機械 dept.

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100

トビイロ任侠 dept.

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-3810

CREATIVE dept.

飛石システム部

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100

飛石システム部

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100

飛石システム部

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100

飛石システム部

〒670-0101 兵庫県宍粟郡山崎町山崎26-3 ☎0790-62-1100



◆最新型カラー現像機導入◆
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

コトエカメラ

Specialty Camera Shop

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL (0790) 62-2089
咲ランド店 TEL (0790) 63-0533

料理旅館・割烹

創業 菊水
文久元年

兵庫県宍粟郡山崎町山崎 287

TEL (0790) 62-1119(代)

寿

幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

あらゆる印刷の企画から製品まで

株式会社 支林館印刷所

宍粟郡山崎町山崎 5 3

TEL (0790) 62-1147(代)

FAX (0790) 62-0081

用途に合わせて

にしん個人ローン

- 住宅ローン
- フリーローン
- マイカーローン
- カードローン
- 学資ローン

・豊かな老後生活のために
 ・資産の効率運用に
にしん個人年金保険

- 定額年金保険
- 変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする



西兵庫信用金庫



<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

TEL. 0790(62)1010
FAX. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。



SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟郡山崎町山崎28

※安全で快適な生活をお届けする※

JOMO 株式会社 ジャパンエナジー 特約店



本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)63-1234(代)
(0790)62-4321(代)

創業明治28年・さつき本舗



御菓子司
おんせんこ

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

本店：播州山崎町さつき通り (電)0790-62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)0790-62-0160
福崎店：福崎町西田原1177 (電)0790-22-7555



OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器

office service イトーオフィスサービス 株式会社

代表取締役 伊藤和久

山崎町中広瀬117-12 TEL (0790) 62-0126